

平安貴族も楽じゃない 牛車ぎっしやに乗るのも一苦勞

京都の平安神宮では、毎年十月二十二日に「時代祭」が行われる。

この祭りは明治二十八年（一八九五）平安遷都千百年記念事業として平安神宮が創建された際、その記念事業の一環として、桓武天皇が長岡京から平安京に入られた日にちなんで行われた祝賀パレードが始まりだ。

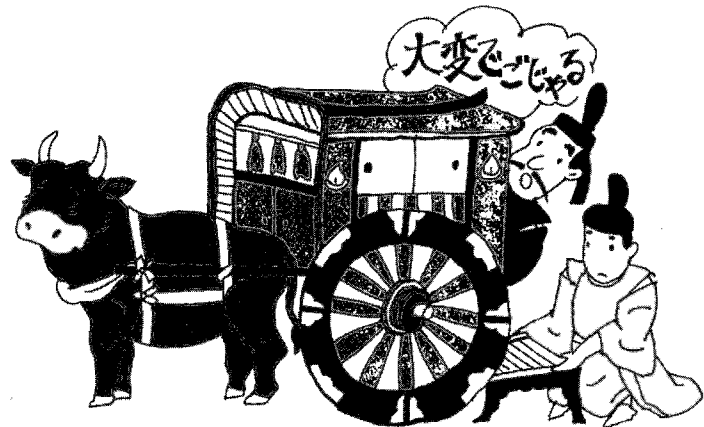
「葵祭」「祇園祭」とともに京都三大祭の一つで、京都の秋を彩る最大の年中行事である。

正午に御所を出発して市内を巡り、三時半ごろ平安神宮に到着する行列は、馬車に乗った名譽奉行を先頭に、錦の御旗の維新勤皇隊から時代をさかのぼって桓武天皇時代の丹波弓箭たんばきゅうせん組ぐみまで千余年の文化・風俗の移り変わりを見せてくれる。

総勢約二千人、牛馬約七十頭、十八の時代列で構成され、なかでもとりわけ人気が高いのが、平安時代婦人列である。

この祭りには、今では見られなくなった牛車が姿を見せ、平安朝の優雅さをしのばせてくれる。

しかし優雅なのは見た目だけで、当時は、実際に牛車に乗るとなると、やかましいしきたりがあつて、大変だったという。



石村貞吉著『有職故実』によると、牛車に昇降するにはまず牛を放ち、欄しじという踏み台を用いて車の後ろから乗り、降りるときは前へ降りたものという。

『平家物語』に木曾義仲が後ろの方から降りたという話を載せて、義仲が都の生活を理解しなかったことを記している。

普通、四人まで乗る定めで、互い相対して座し、一人で乗る場合は、前の簾すだれのところまで進み、左側を背にして、右の方に向かって座った。

また乗る人の位階・家柄や公私用の別などによって用いる車の種類が定められており、その使用には厳しい制限が加えられていた。

ほかにも煩雑な作法がいろいろあったそうだが、現代の自家用車のように気ままに乗るわけにはいかなかったようだ。